2024年度第1回入学試験問題

国　　語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注　　意

1　「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
2　問題は2ページから8ページまでです。
3　解答用紙は問題冊子にはさまれています。
4　初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
5　答はすべて解答用紙に記入しなさい。
6　字数制限のある問題については、かっこ・句読点も一字と数えなさい。
7　文字は楷書(かいしょ)で、一点一画ていねいに書きなさい。
8　質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

台湾出身で現在は日本の大学院生の「わたし」は、ある日、幼少期から親しんでいた張家の五人姉妹のうち、三女の「三おばさん」の重病を知らされ、急いで台湾に戻り、病院に「三おばさん」を見舞った。

わたしたちは白くて長くて死のにおいの立ちこめる廊下をとおって、三おばさんの病室に行った。三おばさんはベッドの上に半身を起こし、椅子に腰かけた張婆々となにか話しこんでいるところだった。

「だれが来たか見てみて」

明るく声をかける小おばさんの背後から、わたしはひょっこり顔を出してやった。三おばさんと張婆々がいっぺんに破顔し、わたしの名を呼び、手を取った。それから矢継早に質問を繰り出してきた。わざわざ帰ってきてくれたの？　だれが知らせたの？　いつ着いたの？　日本での生活はどう？　飛行機は揺れた？　空港から直接来たの？　博士論文は進んでる？

彼女たちの質問にひとつひとつ答えながら、わたしはこの帰国が失敗だったかもしれないとはじめて気づいた。書きかけの論文をうっちゃって、取るものもとりあえず飛行機に飛び乗り、空港に着いたその足で病院にむかったわたしの焦燥と浅はかさは、［　W　］ようなものだった。

「そんな顔しないで」三おばさんが言った。「大丈夫、そう簡単に死にゃしないわよ」

わたしはうなずいた。

「膵臓なの」

「うん、四おばさんに聞いた」

「もうちょっと怖いかと思ったけど……」言葉を切り、にっこり微笑う。「さっさと死ぬのも悪くないわ」

その笑顔が、わたしの記憶の底から或る朝の風景をすくい上げる。それは朝靄のなかで、1困ったように煙草をくゆらせる三おばさんの姿だった。

わたしが小学生のころ、外見には人一倍気を遣う四おばさんは数年に一度、発作的なダイエット熱に浮かされた。たいていはテレビや映画に出てくる女優たちの素晴らしいボディラインに感銘を受けての一念発起なのだが、まるで狙いすましたかのように、いつもわたしの夏休み中にこの発作は起こるのだった。思うに、ほんとうはもっと頻繁に発作に見舞われていたのだけれど、早朝ジョギングに付き合うような物好きはわたししかいないので、夏休みまでなあなあにしていたのだろう。なんの前触れもなく「明日の朝から植物園を三周まわるわ」と宣言し、わたしの都合などおかまいなしに六時に起こしに来いと命令する。〔略〕

一度だけ、三おばさんがわたしたちの早朝ジョギングに付き合ってくれたことがある。三おばさんは長年にわたって不規則な生活を規則正しくつづけていたので、朝の六時にパジャマ以外の服を着て目を開けていることなどまずありえないのだが、その日ばかりはそのありえないことが起こった。おそらく徹夜で麻雀かなにかして、帰宅したばかりだったのではないだろうか。

ともあれ、あの朝、三おばさんは朝靄のたちこめる植物園にひょこひょこくっついてきたのだった。三おばさんは脚が悪いので、もちろん走りはしない。しかし能弁家の彼女に知らないことなどあるはずもなく、すぐにコーチ気取りでわたしと四おばさんに檄を飛ばしはじめた。

「ほら、もっと手を大きくふる！　胸を張る！」

大王椰子の並木道や蓮池のぐるりをまわって帰ってくるたびに、石のベンチに腰かけた三おばさんは手をパンパンたたいてわたしたちに発破をかけた。

「そんなに体を上下させない！　もっとスピードをあげて！」

三周走り終えるころには（ことによると二周、いや、一周だったかもしれない）、四おばさんは怒り心頭で、aにべもない言葉を三おばさんに浴びせかけた。

「あー、もー、ごちゃごちゃうるさい！」口の悪さでは、四おばさんもかなりのものだ。「そんなに言うならあんたが走ってみなさいよ！」

しまった、という表情が四おばさんの顔をよぎった。わたしはドギマギし

た。しかし三おばさんはただ困ったように微笑み、煙草に火をつけ、それからいつもの名調子で四おばさんの益体もないダイエットをけちょんけちょんにけなしたのだった。

病院からの帰り道に、ひさしぶりに植物園に寄ってみた。

蓮池に睡蓮が咲くのはもうすこし先で、朧月の照り映える水面は、そこが泥の池であることをしばし忘れさせてくれた。散歩をする人たち、東屋の欄干に腰かけて愛を語り合う若者たち、黙々と走りつづける人たち——夜空にそびえる大王椰子のシルエットを遠目に眺めながら、わたしはあの日のベンチを目指した。

石のベンチはまだそこにあり、人がすわっていた。

老夫婦がうちわを使って涼をとっている。ベンチのまえをとおり過ぎながら、わたしは三おばさんがついぞ成し遂げられなかったことについて思いをめぐらせた。恋愛や結婚。そして、書きかけの論文のことをすこし考えた。すると、自分が早くも三おばさんのいなくなった世界に順応しようとしていることに気づいて、悲しい気持ちになった。**2**わたしたちの心は、いつでもわたしたちの体とはちがうところに在る。わたしの体はこの国の、この街の、この悲しみのただなかに在る。でも、わたしの心はすこしばかりまえを行っている。いま駆けだせば、先走った心を捕まえることができるのだろうか？心をねじ伏せ、頑丈な鎖で体につなぎとめ、ちゃんと躾けることができるのだろうか？　それとも、これが生きていくということなのだろうか？

わたしはとぼとぼ歩いて両親の待つ家に帰った。まだ四月だというのに、忍冬の香りは重苦しく、夜気は汗ばむほどだった。

帰省していた九日間、わたしは毎日三おばさんを見舞った。ほかのおばさんたちからは、そんなふうに毎日来なくてもいいのにと言われた。それでも、わたしは毎日決まった時間になるとバスに乗って病院へ出かけた。そうしなければ、心においてきぼりを食ってしまうような気がした。たったの九日間ではあったけれど、せめて台湾にいるあいだだけは、自分で決めた距離を止まらずに**3**走りきりたかった。ゴールなどない。あるのはやれるだけのことはやったのだという言い訳がましい自己満足と、東京へ戻る飛行機の予定時刻だけだった。

わたしが病院に通いつめた日々、三おばさんの容態はずっと安定していた。このまま持ち直すのではないかとうっかり信じてしまうところだった。しかし、ほかのおばさんたちのやつれた顔を見ると、そうではないということを思い知らされた。大おばさんは三おばさんが怒りっぽくなったと愚痴り、二おばさんはいつも泣き腫らした目をしていた。だけど、わたしがいるあいだに三おばさんが癇癪を炸裂させたことは一度もない。〔略〕

空港へ向かうまえに立ち寄ったとき、おばさんたちはわたしが生まれたときのことを話題にしておおいに盛り上がった。〔略〕

たぶん、わたしの存在がおばさんたちの［X］になっていた。わたしを生贄にしているかぎり、気まずい沈黙につけ入られることはない。だれも望まない未来をすこしだけ先延ばしにすることができた。しかし、わたしは東京へ戻らねばならなかった。

「ちゃんと勉強しなさいよ」三おばさんが言った。

「うん」

「でも、男はそれだけじゃだめ」

「わかってるよ」

「あんたにはずーっと言ってきたけど、こうと決めたらぜったいに最後までやり遂げなきゃつまんない。でも、心を乱さないかぎり——」

『ちょっとくらい悪いことをしなさい』わたしは**4**彼女の台詞を横取りした。「だろ？」

三おばさんは満足そうにうなずき、ほら、やっぱりあたしの育て方は間違ってなかったでしょ、というふうに**4**顎をしゃくった。

国際電話がかかってきたのは、それから半月ほど経った夜のことだった。

いくぶん湿った夜風が、窓枠を物悲しくゆさぶっていた。

泣きじゃくる四おばさんの話によれば、三おばさんは、死にたくない、死にたくない、とうなされながら、最期に涙をひと筋だけ流したそうだ。そんな三おばさんの姿を想像するのはとてもむずかしかった。三おばさんのことだから、煙草を一服させてもらい、あばよと笑って逝くような気がしていた。とどのつまり、一九七九年のあのころは、[Y]と[Z]の見分けがまだちゃんとつく時代だったのだ。三おばさんは最後の最後まで、わたしに対して[Y]でありつづけた。

わたしはすこしだけ泣いた。涙がとめどなく溢れた、というほどではない。わたしにはやるべきことがあり、いつまでも[Z]でいるわけにはいかなかった。

（東山彰良「或る帰省」『走る?』〔文藝春秋〕より）

問1 [W]に入ることばとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 三おばさんに病状の重さを告知する
イ わたしがわざわざ帰国したことを教える
ウ 明るい雰囲気の病室には不似合いすぎる
エ 日本での暮らしがうまくいっていないことを示す
オ 小おばさんとわたしがひそかに通じていることを暴露する

問2 傍線部**1**「困ったように煙草をくゆらせる三おばさんの姿」とありますが、この時の「三おばさん」の心情を説明した次の文の[A]・[B]に最もよくあてはまることばを、次の選択肢群からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

置かれた状況に対し[A]と感じつつも、[B]ようにしている。

A **ア** はずかしい　**イ** どうしようもない　**ウ** 腹立たしい　**エ** もの足りない

B **ア** 周囲に隠さない　**イ** 場を和ませる　**ウ** 気を抜かない　**エ** 表に出さない

問3 傍線部**a**「にべもない」のここでの意味として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 感情のこもった　**イ** 陰湿な　**ウ** 遠回しな
エ いくじのない　**オ** つきはなした

問4 傍線部**2**「わたしたちの心は、いつでもわたしたちの体とはちがうところに在る」とありますが、この時の「わたし」の「心」と「体」はそれぞれどのような状態ですか。「心」と「体」のそれぞれの説明に「死」ということばを必ず一度ずつ用いつつ、解答欄に合うように、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

「心」は〔 **四十字以上五十字以内** 〕状態。

問5 傍線部**3**「走りきりたかった」とありますが、走りきるというのは「わたし」がどうすることですか。解答欄に合うことばを、本文中から五字以上十字以内で書き抜きなさい。

〔 **五字以上十字以内** 〕ること。

問6 X に入ることばとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 待合室　イ 通過点　ウ 避難所　エ 中心点　オ 会議室

問7 二か所の傍線部4「彼女の台詞を横取りした」「顎をしゃくった」から読み取れる内容として、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」は「三おばさん」を怖がっており、その言いつけをよく守ることで、「三おばさん」から気に入られている。

イ 他人の言うことも途中でさえぎるような不良性を、「わたし」がよく受け継いだことに、「三おばさん」は納得している。

ウ 「三おばさん」と「わたし」の上下関係が、病気をきっかけとして入れ替わり、生意気を言う「わたし」を「三おばさん」は快く感じている。

エ 「わたし」は育ての親のような「三おばさん」の考え方を自分のものとし、「三おばさん」は「わたし」の成長を誇りに思っている。

オ 「三おばさん」の言いつけ通り、博士論文を書き続ける以外のことには目もくれない「わたし」を、「三おばさん」は称賛している。

問8 Y・Z に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。なお、Y・Z はそれぞれ二か所ずつあり、その二か所には共通のことばが入ります。

ア Y 大人 Z 子供　イ Y 子供 Z 大人
ウ Y 成熟 Z 未熟　エ Y 未熟 Z 成熟
オ Y 善人 Z 悪人　カ Y 悪人 Z 善人
キ Y 本音 Z 建前　ク Y 建前 Z 本音

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお本文6ページの算用数字3、4は原文に付いている章番号であり、本文6、7ページの①～⑤の傍線も原文に付けられたものです。

私は小説家です。毎日、文章を書いては、それを書きなおす暮らしをしています。それが私の、小説家としての「人生の習慣」です。

この習慣という言葉ですが、それには、良い意味と悪い意味があります。あまりよくない習慣、たとえばタバコをのむこと。それは肺ガンの原因になる、と調査研究にもとづいて医学者がいっているのですから、皆さんも大人になってタバコをのむ習慣はつけない方がいいし、お父さんにも、できればその習慣はやめてもらったほうがいい。そのような、悪い意味での習慣。

それと、もちろん良い習慣があります。たとえば、しっかり歯をみがく、という習慣。私の子供のころは戦争中で、皆さんは驚かれるでしょうが、しっかりした歯ブラシと歯みがき粉を――そのころは、いまのペースト状になったものなど、見たこともありませんでした――手に入れるのが難しかったのです。先生からは、指に塩をつけてみがくようにいわれました。そういう事情もあって、私の母親は子供が本を読んだり勉強したりすることを大切に思う人だったのですが、歯をみがくようあまりきびしくはいいませんでした。

1それをよいことにして、私はしっかり歯をみがく良い習慣をつけませんでした。そのおかげで、もう永年後悔しています。

文章を書くこと、とくに書きなおすこと。それも、良い習慣だと思います。すくなくとも私は、自分でいったん小説を書きあげてから、幾度も書きなおします。この習慣をつけなかったとしたら、いまも小説家として生きていることはできなかったと思うほどです。

それでは、いったん書いた文章を書きなおすことに、どのような良い効果があるのか？

それには、自分の文章を、よりよく理解してもらえるようにするという、

他の人に対しての効果と、文章をより良いものにするという、自分にとっての効果とがあります。〔略〕

3

さて、もひとつ、私が皆さんにお話ししておきたいのは、子供の時に自分で勉強を伸ばしてゆく、ひろげて行きもするということを、どのようにやるかです。そして、それを大人になっての、働きながら生きる勉強にどうつないでゆくか、ということです。今日は、皆さんのお父さんやお母さんたちにも来ていただいていますから、これは父母の方たちにも聞いていただきたいとねがって、私のやってきたことをお話しします。

さて私は小説家です。教育についてaセンモン的に教わったことはなく——じつは、大学で、教育概論というのと教育心理学というのと、ふたつの講座を大きい教室で聞いたし、教育実習にも行ったのですが——、この国で中、高校の教師をしたことはありません。メキシコシティーにはじまって、カリフォルニア大学の幾つものキャンパスで、またプリンストン大学やベルリン自由大学で教えましたが、それはaセンモンの大学生に対してする、文学についての講義です。一般的な教育とはちがいます。

そこで、私は教える側ではなくて、教わる側のこととして、自分がどのように勉強してきたかを、経験からお話しするのです。私の子供の時の学校の様子は、あらかじめ読んでいただいた私の文章にいくらか出ています。敗戦直後のことで、小学校上級から新制中学にかけての、つまりいまの皆さんの年齢のころの私の村、四国の森のなかの学校には、師範学校や大学で、教育のことを学んだ先生は、あまりいられませんでした。年をとられた先生たちは師範学校出身で、ずっと村にいられた方たちでしたが、戦争中に教えていられたこととは別のこと、反対のことを、平気で教えられました。生徒たちは——とくに私は——あまり良いことではありませんが、その先生たちを信用していませんでした。

そこで私は、bナマイキにも、それこそ良いことではありませんが、2自分ひとりで勉強してやろう、と思い立ったのです。そして見つけた勉強法は、教科書でも普通の本でもいいのですが、そこで発見した面白い言葉、または正しいと思う言葉を、ノートに書きつけて覚えてゆく、というやり方でした。

また、そこに出て来る、外国語や、人の名を書きとっておいて、それを他の本で調べてみるということでした。そして、これは高校や大学に進んで、さらに自由に、さらに積極的にやったこと——そして、いまも続けていること——ですが、いまいった仕方で知ることのできた本から次の本へと、自分で読んでゆく本を見つけて、つないでゆく、というやり方でした。

4

いまも続けている、といいました。それが本当だということを、いちばん新しい例で示します。私は今度皆さんにお話しするときまった時、いくらかでも教育として役にたつ話をしたい、と思いたったのです。それは二〇〇〇年の夏のことです。そして、最近の数年に読んでは教育のことを考えた本の幾つかを、もう一度読んでみました。

それらのひとつに、これは皆さんが大学に入ったころ思い出していただきたい、という気持で著者の名と本のタイトルをいうのですが、ノースロップ・フライというカナダの学者の本がありました。それは『大いなる体系』という題で日本語にも訳されています。しかしここでは、人間の文化での言葉の役割についての、その内容の話をするのではありません。

そこに——私の訳で引用しますが——こういう一節があるのです。

《先生とは、本来、すくなくともプラトンの『メノン』以来認められてきたとおり、知らない人間に教えることを知っている誰か、というのではありません。かれは、むしろ生徒の心のなかに問題①をあらためて②作り出すようつとめる人であって、それをやるかれの戦略③は、なによりも、生徒にかれがすでに、はっきりとは④言葉にできないけれど知っていることを認めさせることな

のです。それは、かれが知っていることを本当に知ることをさまたげている、心のなかの抑圧の、いろんな力をこわすことをふくみます。生徒よりはむしろ**3**先生の方が、たいていの質問をすることの、それが理由です。》

さて、とても難しかったでしょう？　この文章を、いま皆さんが理解してくださらなくてもいいのです。いま私は、この文章を実例にして、どのように自分で勉強するか、ということの、ここに出てきた大切な単語、文節の脇に書きつけた数字でいえば③の、戦略を覚えていただこう、としているのですから。

戦略という言葉は、英語でいえば strategy です。皆さんがゲームをやる時、まず攻めてゆく大きい規模での方針をきめるでしょう。サッカーでいえば、トルシエ監督が試合に勝った後の談話で、まず前半は守りを固めてゆこう、後半は攻撃してゆこうとした、という。あれは戦略 strategy をきめた、ということなんです。そして後半になると、ゴールまぎわで、中村選手が高原選手に幾度もパスを送ります。この実際のこまかな進め方が、戦術 tactics なんです。皆さんも自分のどうしても認めてもらいたい要求をお父さんやお母さんに切り出す時、自分がはっきり言葉にしてそう考えているのじゃないけれど、胸のなかではなんとなく――これが、さきの引用のうちの④です――戦略と戦術を持って、そうするのじゃないですか？

しかも、そのことをはっきり口に出してお父さんやお母さんにいうのが、なんとなく悪い、と皆さんが感じてもいる場合、ということがこれまでにあったのじゃないですか？　それを心のなかでの抑圧、英語だと repression といいます。それが⑤。

問題という言葉の横に①と書いたのは、もともとは subject という英語だからです。先生方は、それを主題と訳されるのが **A** でしょう。しかし、私は、いま考えるこの問題、と強める気持をこめてですけれど、もっと **A** の、問題という言葉で訳しました。

さて②と書きつけた、あらためて作り出す、という言葉にあたる英語は re-create です。re の後にハイフン - がついていて、つまり複合語であることが示されています。〔略〕

私がなぜこんなこまかいことをいったかというと、私は子供の時、とくに辞書を熱心に引いたからです。そして英語の文章の意味をこまかく自分の頭にいれて、自分の日本語で内容がいえるようにしたのです。そしてほかの場合にも、ああ、これはあの英文でいっていたことと同じだ、と自分で判断できるようにしたからです。英語を英語のまま理解するということは、もちろんいいことです――帰国**c**シジョの方は、実際にそうでしょう――。しかし、私はこうしたんです。私の育った環境ではこうするほかなかったんですね。そうすると、英語の本を読む時間は――日本語の本でも、きちんと読むとそうですよ――長くかかりますが、あきらかに、ためになります。

柳田國男という学者が、先生から教えられたことをそのまま真似るような勉強の仕方をマナブ――マネブという古い言葉と同じ――、それを自分で活用することもできるようにするのがオボエル――自転車の乗り方をオボエルというでしょう――、そして教えられなくても自分で判断できることを**4**サトルと分けました。マナブからオボエルに進まなくてはならないし、できればサトルようになりたい、といっています。

（大江健三郎・大江ゆかり『「自分の木」の下で』〔朝日新聞社〕より）

問1　傍線部**a**～**c**のカタカナを漢字に直しなさい。

問2　傍線部**1**「それをよいことにして」の意味の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　すばらしい母の考えにしたがって
イ　良くないことだと自ら反省をしながら
ウ　歯みがき粉がまだなかったので仕方がなく
エ　母のしつけがゆるやかだったことにつけこんで
オ　良いか悪いか判断がつかないことにかこつけて

問3　傍線部**2**「自分ひとりで勉強してやろう、と思い立ったのです」とありますが、筆者の「勉強」に関する説明として誤っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　先生が教えた文章を真似て「マナブ」。

イ　次々に自分で読むべき本を見つけて読みつないでいく。

ウ　書物にのっている外国語や人名を他の本で調べてみる。

エ　英語の文章の意味を詳細に理解し自分なりに日本語に置き換えて「オボエル」。

オ　教科書以外の書物も読んで興味を持ったり正しいと思ったりした言葉をノートにメモする。

問4　傍線部**3**「先生の方が、たいていの質問をすることの、それが理由です」の「理由」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　先生が言葉による置き換えを目的としてさまざまな事例を出しながら、生徒がまだ知らない新しい考え方を、単純化して説明するため。

イ　先生が大局的な方針をもとに具体的な発問を通して、生徒の胸の中で言語にできずにいるものに、形を与えて生徒自身に気付かせるため。

ウ　先生が学習目標を明示して勉強方法を解説することで、生徒に正解が一つでないことを理解させて、生徒から積極的に質問をできるよう仕向けるため。

エ　先生がサッカーを例にとって戦略や戦術を教えることによって、生徒が全く知らない未知の世界に言葉を与えて、生徒に知ることの本当の意味を考えさせるため。

オ　先生が戦術や戦略をうまく使って、生徒が知っている事柄に対する別の側面をそれとなく解説することで、本当の意味では知っているとはいえないことを分からせるため。

問5　傍線部**4**「サトル」とありますが、筆者の実践した「勉強法」のうち「サトル」にあたるものを三十字以上四十字以内で答えなさい。

問6　**A**に入る最もふさわしい語を、章番号3の本文中から二字で書き抜きなさい。

［以下余白］

2024年度 第１回	国　語	受験番号					氏名	

一

問1

問2

A

B

問3

問4

「心」は

状態。

問5

ること。

二

問1

a

b

c

問2

問3

問4

問5

問6

問7

問8

問6

問5

30

40

50

40

合計